



小説工学

■ 阿川 大樹



世間では、小説家というのは数学や科学からもっとも遠い存在だと考える人も少なくないようだ。しかし、わたしを含めて、いわゆる「理系」のバックグラウンドを持つ小説家は決して少なくない。

実際、大学で自然科学や数学を学んだ自分から見て、小説を書くことのプロセスの大切な部分は、自然科学にも工学にも似ている。

観察対象が自然ではなく人間や社会に置き換わっているだけで、目の前にあるものを常識を疑いながら観察し、隠れた本質を見出そうとする作業は基礎科学の姿勢とほとんど変わらない。違うとしたら、科学はひとつの法則に導かれる普遍的なものを求めるが、人間や社会は多様性を持ち、小説は「架空の特定個人」の人生と彼(女)を取り巻く社会を描こうとする点だ。

執筆(製造)に当たっては、自分という「製造装置」の状態を常にチェックしながら、適切な保守を行い最大限の稼働率を確保する。必要な時には装置(著者の心身)の耐久性や性能の限界を探りながら、納期(締め切り)までに、最高の品質のものを完成させようとフル稼働させる。それはまさに工学のアプローチだ。

ぼんやりしたアイデアを構想へと発展させる。構想を形にする前に、頭の中にいくつものプロトタイプをイメージし、どのような登場人物(部品)をどのように配置するか、大まかな設計をし、脳内で夢想(シミュレーション)しながら検証する。物語の章(モジュールまたは下部構造)の定義をし、配置と接続を決める。執筆が始まると、多くの場合登場人物の再定義が行われ、その人格(仕様)が変更されることもある。システ

■ 阿川 大樹
小説家

1954年東京生まれ。東京大学在学中に野田秀樹らと劇団「夢の遊眠社」を設立。半導体技術者を経て、技術者を主人公とした『覇権の標的』で小説家デビュー。近著『終電の神様』は累計45万部を超え、韓国語にも翻訳されている。



△開発と決定的にちがうのは、小説ではモジュールの再利用ができないことくらいだ。

学校で算数や理科が大嫌いで、製造業に従事した経験がない小説家たちは、もしかしたらこのような工程を明示的に意識してはいないかもしれない。けれど、無意識の中で小説を書くためにやっていることは同じなのだ。

具体的な執筆（詳細設計）をするには、ディテイルに関する情報が必要になる。

その情報収集も今ではかなりIT化されている。

たとえば、主人公がニューヨークのアポロシアターの前に立っているとする。

恋人と別れ傷心の彼の目に何が見えるか。かつてなら実際にその場所へ出向いて取材をしなければならなかった。今なら、ストリート・ビューを使えば、彼の視野の中にどんな店があり、どんな車が駐車していて、どんな木が植えられ、どんな服装をした人が歩いているか、臨場感を持ってわかる。彼女と最初に出会ったYMCAまで道を辿って歩いてみることもできる。

ただ、液晶画面からは匂いがしない。音がしない。

大丈夫、小説は虚構だ。排気ガスの臭いも、ヒップホップのリズムも、あとは著者が自由に創り出せるのである。